目　次

はじめに　2
良寛と書　5
良寛と秋萩帖　11
良寛の書と秋萩帖との比較検討　17
良寛と紙　37
料紙に応じた歌や書体　45
良寛の愛用用紙　61
良寛と漢詩　67
良寛と和歌　81

良寛と萬葉集　89
結び　98
あとがき　108
蓮露（はちすのつゆ）
――良寛と貞心尼の相聞歌――　113
良寛年譜　最新版　120

良寛の仮名の書は秋萩帖の色が大変濃いとされていることは、もはや通説となっている。遠くは良寛生存中に解良栄重が『良寛禅師奇話』（本文引用）において、近くは明治の相馬御風、原田勘平等が秋萩帖との関係は力説しているのである。現に、良寛が手拓本秋萩帖を臨書したその作品が、東京国立博物館に保存されている。

ここでは、良寛の書と秋萩帖の関係を通して、良寛の書の基盤はいつ頃から成っていたか考察していきたい。

良寛の学んだ法帖を書簡の中から挙げてみる。引用の書簡は『良寛書簡集』（谷川敏明編）に拠るが、後述の書簡も同様である。

(イ) 古訓抄長々御拝借候仕難有奉存候　王羲之石拓当時御入用御坐無候ハヽ御拝借奉希候　早々以上

十二月九日

今年のみそもちとしほからく候間何卒少々おんかへたまはりたく候

定珍老　　良寛

(ロ) 如仰厳寒信にこまり入候　此比ハ少々うちくつろき候　王羲之法帖二巻御返申候　下巻御借被下度候　過し比はたはしたまはり候　実に妙に候　于今うち忘御礼申不上候　頓首

十二日廿六日　　良寛

尚々みそ少々御換可被下候

定珍老

(イ)(ロ)ともに王羲之の法帖の名前はわからないが、しばらく借りて返している。

(ハ) 先日は久々にて御面談仕大悦奉存候　然ハ道風の石ズリを貴宅ニ失念仕甚不安心に候　御むつかしながら御尋被下此者にもたせ可被下候　ウハガミは丸いコガタ（図）初ニ散々難……もし主人の御るすにてしれず候ハヽ是をふちやうにして御尋可被下候　以上

正月十三日

解良氏　　良寛

(ニ) 山田杜皐老　　良寛

さゝなみ帖の歌落候処に字を樹候ともおほつかなく候　大目に御覧可下被候　由之居士にも御聞合被遊ハヽよかるへく候

廿三日　　からす

(ハ)(ニ)ともに小野道風の秋萩帖である。さゝなみ帖とあるのは、良寛手拓本秋萩帖（糸魚川市歴史民俗資料館蔵）のことである。これは「散々難見也」から始まっているためである。原跡秋萩帖（文化財保護委員会蔵）では「安幾破起乃」の句から始まっている。

(ホ) 暖気之節如何御暮被遊候や　野僧も此程は漸快気仕候　先比は私るすに痰の薬宇治之茶相とゝき候　此度ハ酒なむはんつけ恭納受仕候　懐素自叙帖之事ハ書けハ長く成候間此人に御尋被下度候　以上

三月廿九日　　良寛

中原元譲老

懐素の自叙帖を学んだことがわかる。

(ヘ) 如仰厳寒信に困入候　此頃は少々打くつろき候　王羲之法帖二冊お返し申候　後巻お遣し被下度候

證聴老　　良寛

王羲之法帖である。この書簡は證聴老に宛てている。(ロ)では定珍老宛であるが(ヘ)と(ロ)の内容が似ている。良寛には和歌でも漢詩でも類似のものが多い。この書簡も例にもれず、というところであろう。

(ト) 今日は御相承大慶ニ奉存候　野僧無事に寒気を凌候　御薬一種恭納受仕候　小紙うけ取候間したためしさいに指